牧 由希子



二〇一一年の私

だ報道されず、私は妹から届いた でした。現地では、発災直後はま アフリカのボツワナに長期赴任中 メールによって日本で大変なこと 東日本大震災があった二〇一一 APAN入職前のことで、 私が現在所属するCWS 南部

チ・ワールド・サービス)だったの で設立されたのがCWS(チャー ニカルな人道支援団体として米国 ションを遂行するため、エキュメ 物資がララ物資であり、 チャンが献金を集め、 敵国だった日本に、北米のクリス 贈った救援 そのミッ

ちでした。 央委員会の三代表である宣教師た 事業を運営していたのは、ララ中 受け入れ、当時の厚生省と連携し、 ました。そして、日本側で物資を ク戦時救済奉仕団も名を連ねてい 団体であり、その中にはカトリッ 事業に参画したのは米国のキリス つ官民協働による一大事業でした。 ト教系奉仕団体を中心とした十三 ララ物資は教派を超えた連携且

協力し、このプロジェクトを成功 ナダメソジスト教会)とともに連携 表となったG・E・バット博士(カ 両神父は、他の二人、 のミカエル・J・マキロップ神父 土学園教員)とCWS初代日本代 エスター・B・ローズ女史(普連 (後にヘンリー・ジョセフ・フェルセッ その三人の中には、カトリック 神父に交代)がおられました。 フレンド派

がれました。

務は、自身がかかわることが できなかった東日本大震災後 ながりから、直感的に飛び込 の復興支援事業でした。 んだ私が最初に任せられた業

東北復興支援

を再開することになったのです。 日本を支援しようと東京で事務所 日本大震災発生と同時に、再び、 空白期間を経て、二〇一一年の東 しました。その後約六十年という 了とともに、一度は日本から撤退 CWSはララ物資の配給活動終

する二○一三年までは、アジア太 日本の団体として法人格を取得 に導いたと言われています。

Catholic Relief Service による協 Friends Service Committee 本キリスト教奉仕団)に引き継 で続きましたが、その働きは、 働)が終了する一九六三年ま ララ物資とその後継事業とな 国際キリスト教奉仕団(現日 ったCAC物資(CWS、American この超教派による連携は、

こうして、 ララ物資とのつ

災地で活動する複数の支援団体と 契約し、復興支援事業のモニタリ 二〇一四年に私が入職しました。 緊急支援を行っていました。その で他団体や地元NPOと連携し、 新規雇用したスタッフの二名体制 所から派遣された日本人職員と、 平洋地域を統括するバンコク事務 ング・管理を行うというものでし 当時、私が担当した業務は、

震災発生から二年後に帰国した

起きたこととは信じられな 様子を見ていると、現実に り、海外でTV越しにその 毎日映し出されるようにな 衛星放送で津波によって家 が起こったことを知らされ や車が押し流される映像が やがてCNNやBBCの

という被害に遭い、実家がある関

ことは、急遽大使館に設置 周囲からお見舞いの言葉を ようになりました。現地で 故のニュースが報道される された窓口に義援金を届け いただく中、 その後、福島第一原発事 自分ができた

い光景でした。

RA)」とのつながりによるもの できたのか? それは「ララ(LA なぜ日本で無名だった団体を信用 の存在を知りませんでした。では、 す。実は、私はそれまで、CWS ANと出会い、現在に至っていま て、二〇一四年にCWS JAP 東へUターンを決めました。そし

ララとCWS

●まき・ゆきこ 埼玉県生まれ。女子聖学院中・高、法政 大学、英国 University of Reading(レディング大学大学院)卒業。1994 年ルワンダ難民支援から始まり、タンザニア、ボツワナ、沖縄本島北部等をフィールドに環境保験・NCC 書記・ACT、およびシフ CWS 入職。NCC 書記・ACT ジャパンフォーラム事務局。

宅が直前に台風の直撃で半壊する 私は、十年暮らしていた沖縄の自 CWSとの出会い せんでした。 なるとは、まったく予想していま 将来、災害支援にかかわることに

方々ではないでしょうか。敗戦し、 れた脱脂粉乳を知っている年代の るのは、終戦後の学校給食で出さ 日本人でララと聞いてピンとく



た。そのため、 復興フェーズに切り替わった 気仙沼や福島に出 被

張し、特に福島には何度も足を運

験・教訓を伝える活動など多岐に 政策提言や海外に向けて福島の経 定とホットスポット特定に始まり ログラムや生活圏内の放射線量測 もたちの健康を守るための保養プ CWSが行った福島支援は子ど

ました。 おいて、次々と大規模災害が発生 たさらに、その間にも、国内外に がとうとう困難になりました。 年ほど前から福島関連の予算確保 ところが、私たちの団体でも、 でに長期間かかる環境破壊です。 に加えて放射能汚染という解決ま し、それらの対応に追われていき 福島が受けた被害は、自然災害

防災・減災を目指して

Ļ 継続が困難になった団体は少なく が発足したものの、その後、活動 そうだったように多くの支援団体 迎えました。震災を機に私たちも と分野・業界に大きな影響を及ぼ 東日本大震災は、数多くの個人 同様に私たちの団体も転機を

9

まだ、自分が東北復興支援や近い ることぐらいでした。このころは

特集/東日本大震災10年

て国内外のパートナー団体と連携 内で頻発する豪雨災害などに対し ビバッタ大量発生)被害、 震やパキスタンの害虫(サバクト ミャンマーの洪水、スラウェシ地 応に加えて防災・減災を活動の柱 に拠点を置く組織として、災害対 ビジョンを見直し、災害大国日本 では、四年ほど前、団体活動方針・ ありません。CWS JAPAN にしていくことを決めました。実 支援を行ってきました。 国内外において災害は続き、 同時に国

という活動も行っています。 訓や課題を取りまとめ、発信する 及啓発、災害対応から得られた教 防災・減災に必要な技術移転や普 また、平時にできる備えとして

パートナーシップ他団体との

この十年間で何が変わったの

を意味します か? この問いに対して、「ネット 「絆」と近く、どちらも「つながり」 ク」の増加が挙げられます。 震災後によく聞かれた

震災以降、災害対応支援団体



当します。 間を経て二〇一六年に設立された ットワーク (JVOAD) などが該 全国災害ボランティア支援団体ネ のネットワーク組織も結成されて グループが増え、同時に全国規模 った東日本大震災支援全国ネット いきました。震災直後に立ち上が ・ク(JCN)や三年の準備期

事務局を務める「ACTジャパン・ 類似した動きが見られ、CWSが フォーラム」もその一つです。 また、キリスト教界においても

> 災の普及啓発です。 応とネットワーキング、防災・減 主な活動の柱は、国内緊急災害対 議会(NCC)とCWSによって 日本で加盟する日本キリスト教協 体、ACTアライアンスであり、 国内フォ 正教会・関連団体で構成されるグ ローバルでエキュメニカルな連合 ACTは、プロテスタント教会・ ーラムを結成しました。

学びました。 でカタチある支援ができることを 数の団体が不足分を補い合うこと 限られますが、志を同じくする複 緊急災害支援は、予測なく、ヒト・ に二度の災害対応を経験しました。 一組織が対応できることは非常に モノ・金+情報を必要とするため、 フォーラム発足から二年、すで

地域に立つ教会の視線

災害対応や防災・減災について懇 談してきましたが、大多数の方々 県に出張し、多くの教会関係者と フォ が無力感を抱いており、教会本来 の働きとの関連性が見いだせず、 この二年、 ラムの立場で、都内、他府 CWS、またACT

る現象が見られます。 力の限界があって、特に社会的弱 て、教会は地域に立っています。 者には支援が届かず、 した。しかしながら、行政にも能 行政に委ねる姿勢が見受けられま 災害は地域で起こります。そし 取り残され

のかもしれません。災害支援の中 私たちの「時間」も貴重な献げも す。物理的な支援も必要ですが、 れば、何でもアリだと考えていま は? 私は、求められることであ ところが、視線はどこに向いてい つで、被災者の愚痴を聴くという な活動があり、「傾聴」もその一 には驚くほどきめ細かいさまざま ると感じています。 変えることが最も難しい課題であ るでしょうか? 教会内の文化を 最後に、 本当に必要な支援と

これを憶え、示された道を歩みた は幸いなり」が引用されています。 三十五節から「受くるより与うる ち合いが謳われており、バット博 のも喜ばれる奉仕だったりします。 ララを受け継ぐ者たちとして、 使徒言行録二十章 分か

いと思います。 士の愛唱聖句、 「ララ五つの精神」では、

11